

京都新聞賞

誹謗中傷のない社会への第一歩

京都府・京都市立七条第三小学校

六年

大野 おおの 季夏 まき

現在、世界中で人種差別や男女差別、偏見や誹謗中傷が起きて、たくさんの人が被害にあっている。

この事実に対して、私は自分が発する言葉の重みを一人一人が理解することが大切だと考える。

私がそのように考える理由は、若者がSNSでの誹謗中傷により自ら命を絶っているというニュースをたびたび報道により耳にすることがあるからである。SNSに投稿している側の人たちは、SNSを見ている側が自分の姿が見えないことを利用して、言葉の重みを考えることなく、自分の言いたい主張を投稿している。その言葉により、受け手となる人は傷ついていることも想像できる。

実際、私も学校生活の中で傷つけるつもりはなくても、傷つく言葉を聞いたり、自分がされて嫌だなと思うたりしたことも経験している。

たとえ冗談や軽い気持ちであっても、言ったことが相手には自分の想像以上に傷つくことにつながってしまうことも少なくない。

言葉は人によってとらえ方が異なり、凶器になることもある。

そこで私自身にできることを考えてみた。それは相手の気持ちを考えて発言することだと考える。けれども、毎回そのようなことを考えて会話することは難しい。だから、自分の中で人を傷つけるから、絶対に使わないという言葉をストックアップしておき、会話する時に心がけるようにしたい。

しかし、私だけが気を付けていても、誹謗中傷に悩まされる人はなかなか減らないだろう。

では、今の私にできることはどんなことだろうか。それは、友だ

ちとの関係に悩んでいる人の話を聞いてあげたり、相談に乗ってあげたりすることだと考える。しかし、クラス内できつい言葉を使っている人を見たり、聞いたりする人がいたとしても、その場で私から注意する勇氣はもてず、なかなか難しい。私にできることは何かと考えると、私がお手本になればいいんだという考えに行き着いた。私がリストアップした言葉を使わずに誰も傷つけない言葉を使ってマネしてもらえような人物になることができれば、誹謗中傷を減らすことにつながるのではないかと考える。

そのために、私の仲のよい友だちから仲のよいグループにマネをして広がり、そしてクラス全体、学年全体に広がることにより、学校を卒業して社会に出た時に、もっとたくさんの人に広まることにつながり、人を傷つける言葉を軽い気持ちで発する人は減っていくのではないだろうか。

はじめにも述べたように、言葉は人によってとらえ方も違い、とらえ方によっては時に凶器になってしまふ。

これから私は、学校を卒業して社会に出てたくさんの人に出会うことになる。その中で、気が合わない人もたくさんいるだろう。決してそんなつもりはなくても、よくない言葉を相手に投げかけてしまつて相手を傷つけてしまつこともあるかもしれないが、よい言葉の使い方をまねしてもらえる人になるために、言葉の重みと言葉を発する責任を自覚して、成長していきたい。

今、私と同じくらいの年齢の人でもSNSでの誹謗中傷に悩んでいる人もいるだろう。そのような人たちに伝えたいことは、一人で抱え込まずに、身近な人に相談してほしいということである。

また、自分が悩まされている問題を減らしていくために、自分からまず行動して、周りに人に広めていってほしい。そして、何よりこれからの社会が誹謗中傷の被害で苦しむ人がいない明るい社会になることを強く願っている。

